

壁尻×カントボーイ

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- 愛なしオナホ
- 輪姦
- イラマチオ
- 中出し・ボテ腹
- 快樂墮ち

「つくそ、放せ、放せよおっ！」

無機質な白い金属の壁を思いきり叩く。

しかし、手のひらに冷たさと痛みを与えてくれるだけで、壁はびくともしなかった。

今、黒のショートヘアを振り乱しながら怒鳴っている青年の名は大地（だいち）。地元で暴れまわっていた不良であり、警察に補導されて百日間の『壁尻便所奉仕活動』を命じられたばかりである。

ここはぱっと見公衆トイレにしか見えないが、全て個室である。便器の代わりに壁に人間の尻がハマッていて、そのうちの一つに大地が設置されているのだ。

しかも、ただの公衆便所の壁ではなく、叩いても暴れてもびくともしない程度には、とにかく頑丈なのだ。

いわゆる『壁尻』状態の大地には、もはや設置された時点で未来はない。尻だけでなく足もろくに動かせない。狭い穴に太ももが通され、頭側にその先が流されているためだ。

膝から下は自由だが、暴れたところでかかとか壁を掠めるだけ。前半身は確かに後ろ半身に比べれば自由だが、壁にハ

メられている時点で不自由この上ない。結局、このままおとなしく奉仕活動を行うほかないのだ。

だが、その現実を大地はいまだ認められずにいた。

「あっ♡んおほ♡きた、ちんぽっ……ちんぽおっ♡♡♡」

「しゅきっ♡おちんぽしゃまっあ`♡♡♡んぎッィ`……っひぐ、っおあ♡もっと、もっとお`♡」

どちゅっばちゅっ♡パンッパンッ♡♡♡

ぐちち、ぬちっ♡どちゅんっッ♡♡♡

「くそっ……聞きたくねえのに、耳もふさげねえっ……！」

左右から聞こえてくる他の人間のみっともない無様な喘ぎ声。肉を打つ音やいやらしい水音だっている。

壁のおかげで直接は見えないが、見えないなら見えないで余計に想像してしまう。

しかし嘆く暇もなく、大地の背後……ようするに尻側に人の気配を感じた。

「おっ、この便器は今日からか。しかもカントか。おまんこもケツ穴も両方あってお得だな」

「っひぎ！？」

男の声が聞こえてくると同時に、ばちんっ！あいさつ代わりに言わんばかりに思いきり尻を叩かれ、大地は悶絶する。

壁のせいで尻側で何が起きているのか見ることもできず、身構えることすら叶わないのだ。

しかもこの男は、大地にとって聞き捨てならぬことを言っていた。

（くそっ……！カントボーイってこと、誰にも知られなくなかったのに……！）

カントボーイ。男なのに、ちんこの代わりに女のまんこがついている特異な存在。滅多にいない存在ではあるが確かに実在するその性に、大地は生まれてからずっと悩まされてきて、秘密にしてきたことだったのだ。

当然誰とも付き合ったことのない処女であり、この先だってツレを作る気なんてなかったのに。

それなのに、こんな、補導されたばかりにバレて、拳句の果てに壁尻奉仕をさせられることになるなんて。

あまりの屈辱に下唇を噛みしめる。

しかし、そんなことは大地の尻でコキ捨てに来た男には関係ないし、知る由もないのである。

「うおっ、すっご、まんこがぴっちり閉じてるし、こりゃ処女か？あたりだな、へへへ」

「っうあ……ん、んひっ、やめろっ……お」

「おお、反応もうぶだねえ。そっち側に回って顔を見てもいいんだが、もう金玉が爆発しそうなんだよ～」

男は両方の手のひら全体で尻肉を掴み、左右に広げてまんこケツ穴を確認してくる。

生暖かい吐息が股間に当たって、気持ち悪さに思わずぶるりと全身を震わせながら身体を縮こませた。

しかし、男はそんなのお構いなしにぐにっぐにゅうっ♡と
思う存分尻を揉み、満足したのかばぁんっ！と大きな音がす
るほど強く尻を叩いてから手を離す。

「うっ……っぐ、好き勝手、叩きやがってえ……！」

「こらこら、そんなこと言っちゃダメだろ。更生するために
壁尻便所奉仕をしてるんだから。どれ、おじさんがえーと
……大地君の更生のためにひと肌脱いであげよう！処女もも
らってあげるからね♡」

恨み言を呟く大地に、男は優しく諭すような声音で声をか
けてくる。当然、大地にはちっとも嬉しくもなんともない。

そもそも更生する気なんてゼロで、ここから逃げ出したい
とすら考えているのに。

男はそんな大地の反抗心を知ってか知らずか、あるいはど
うでもいいのか、人差し指をぴっちりとした割れ目に這わせ
てくる。

「っひぁ……っう、やめっ……」

「ぴっちり閉じてるねえ。クリもちっちゃくて可愛い、ほらこうして、くーりくーり」

「っぎゅ！？♡っは、はうっ……そこ、やめろ、っお！」

割れ目を数度撫でた後、小さな皮をかぶったクリトリスに男は狙いを定めた。

人差し指の腹でくにくにと押し潰され、大地はなっさけない甘さの混じった喘ぎ声を漏らし始める。

人に見せたことがないのだから、当然触れたこともない。自慰なんてカントの自分が気持ち悪くてやろうとすら思わなかった。

だからこそ、大地には全くと言っていいほど快感に対して耐性がなかった。

（なんだこれっ……触られると、腰抜けそうなくらいきもちい……っ！？）

くに、くちっ……くりゅっ♡

男は器用にクリと割れ目の両方を平等に弄り回してきた。
腰が勝手にわななき、全身に変に力が入ったり、逆に抜けた
り、早くもコントロールを失いつつある。

表情が見えなくとも、壁尻利用常連の男にはそんなことお
見通しである。ここに来たばかりの時は大体の便器が反抗的
で、童貞処女だったり、女しか抱いたことがなかったりする
輩が大半だ。

だが、こうしてちょっといやらしく触れてやると、自由を
奪われているシチュエーションも相まって、若き肉便器たち
は簡単に快感を感じ始め、最終的には陥落する。

現に、ちょっと撫でてクリをこねくり回しただけで、割れ
目からとろおりと粘ついた体液が滴り始めていた。

「あっ……うく、ん、んう……っあ」

「ぐちょぐちょに濡れてるねえ。よかったね、才能あるよ？
僕は優しいからきちんと慣らしてあげる」

「っお、あ！？♡」

ぬぷぷ.....っ♡

男の声かけとともに、ゆっくりと人差し指がぴっちりと閉じた膣を割り開いていく。

すでに愛液を滴らせているおかげで痛みはなかった。むしろ、狭い膣内を爪の先がひっかけ、無理やり押し広げるたびに腰全体に甘い痺れが走っていた。

気持ちいい。望んでもいない、顔すらわからない男にこんな無体に働かれて感じてしまう。

(ありえない、ありえない、ありえないっ！こんなのっ.....絶対おかし.....)

「んひっ！？っおう、うおあゝっ.....まで、ゆびっ.....ふえ、っあ、っおあえゝ♡♡♡」

ぐち、ぬち、ぬぷぷっ♡

ぐちゅ、ぐちゅうううう~~~~♡ぬぷんっ、ぞりゅっ♡

気づけば指は三本に増えていて、そのころには大地はすっかり出来上がっていた。

決して激しいことをされているわけではない。だが、男の触れた個所はどこもかしこも快感が勝手にあふれ出てきて、喘ぐことしかできなくなるのだ。

大地のまんこはとろとろひっきりなしに愛液を滴らせ、すっかり身体に力が入らなくなっていた。

腕はだらんと下に伸びているし、明るい茶色の瞳はすっかり快感でどろどろに蕩け、時折びくっ♡びくんっ♡と尻がいやらしく誘うように跳ねている。

慣れない快感に反抗心という名の牙は折られ、すっかり肉便器らしさが顔をのぞかせていた。

「そろそろ食べごろっぽいね♡それじゃあ.....いただきまーすっ！♡」

「っおうん♡っひ、っいい.....！？はい、はいってっえゝ.....っおほ♡♡♡」

ずぶんっ！身構える間もなく、男は前を寛げ、とろとろのほかほかに耕された大地の処女まんこに、容赦なく反り返った赤黒い巨根を叩きつけた。

大地の口からは濁った聞くに堪えない喘ぎ声が零れ落ち、
衝撃と快感に尻が揺れる。

入口から奥の子宮口まで一気におちんぼで貫かれ、大地は
身をよじり、必死に前に逃げようとする。処女膜がぶちぶち
慈悲もなく破られたのに、まったく痛くないのだ。

血が愛液に混ざってピンク色となりしたたり落ちるが、そ
んなことお構いなしに男は後ろからどちゅどちゅオナホでコ
キ捨てるように大地の膣を穿ち続ける。

「はーっ……いいよお、最高だよ、処女まんキッツ♡」

「うぎっ♡っおあ、ん、ンゝ うっ……ふーっ♡ふへっ♡う、
なんれ、なんっれっえゝ……ぎもち、いいのっおゝ……！」

「カントなんてみんなそうだよ♡おまんこをほじほじされる
とすーぐあへあへ言うんだから、っふ、今締まったね？意地
悪なこと言われたのに感じちゃうんだ♡」

「ちが、っあゝァゝ♡っくお、っおほ、ほひっ♡ちがう、の
についゝ……ッ♡♡♡」

壁に爪を立て、足先を丸めたり閉じたりして快感を逃し、理性を保とうとする。しかし、そんなささやかな抵抗は亀頭に入り口から子宮口まで一気にごりゅごりゅ掘削されてしまえば一瞬で無に帰してしまった。

男はリズムカルに腰を振り、奥に押し当て小刻みに揺らす。それできゅうっ♡と膣が甘くちんぽを舐り締め上げると、今度は抜けるギリギリまで腰を引いてくる。

気持ちいい。気持ちよすぎて、反抗心がガリガリそがれていく。こんなことで屈したくねえ！大地は目じりに涙をためながら、必死に抗っていた。

「ここがGスポット.....子宮口も初めてなのに降りてきちゃってるね♡メススイッチだよ、覚えておくんだ」

「やあぁッ♡うんあ♡しらな、そんなのっ.....っうぐ、おれ、いらな、覚えたくないっ♡♡」

「まだまだ肉便器としての自覚が足りないなあ……っふ、僕
みたいに優しい客だけじゃないんだよ？っぐ、出すからね、
記念すべき初めてのお仕事を完遂するんだ、よっ」

「うるっせえ！だまれ、っえ♡おりえは、んう、っぐ……～
～っお、お♡♡♡」

どびゅっ♡どびゆるるるるうっうう♡♡♡

熱い。おちんぼ様に媚びる膣が収縮し、男はうめき声とともに大量の精液を吐きだす。どぷどぷ、どびゅっ♡容赦なく吐きだされる初めての子種が腹の中を満たし、しみこんでいった。

「あええ……？♡」

出された瞬間、脳髓が甘く蕩け、痺れる。力強い雄、そして大量の子種。初めて受け入れた大地はありえないはずなのに絶対的な幸福感に満たされていた。

これこそが己の役目。強い雄のおちんぼケース♡自分のような出来損ないのカントボーイは男ではなくただのメスに過

ぎず、つよつよおちんぼ様に屈服し、おまんこでご奉仕することこそが使命♡

夢うつつになりながら、大地は腰を揺らし、最後の一滴までちんぼから新鮮なザーメンを搾り取ろうとする。

「あー、よかったよ♡将来有望な精液便所だね」

「おほお.....♡んひ、っあゝ、っはへ♡せいえき、あちゅ
いっいゝ.....ちんぼ、きもちい.....♡あうっ♡」

「これからもお仕事頑張って、立派に更生するんだよ♡」

最後に仕上げとばかりに男は一度尻を叩き、ずるりとちんぼを引き抜いて、そのままいずこかへと去っていった。

ちんぼの味を覚え込まされたまんこからは、とろおりとついさっき出された白濁が垂れ、壁を伝い落ちていく。

処女を散らした大地の尻は、精液を垂らすことによって壁尻便所として完成したと言えるだろう。

「ひぐっ.....うぐ、くそお.....ッ」

しばらくしてようやく快感の余韻が抜けてきた大地は、悔し涙を静かに流した。

しかし、そんな涙を流したところで大地を救い出してくれるような人間は誰もいない。

ほどなくして、今度は複数の足音が大地の設置されている個室に近づいてきた。

「おっ、ここ空いてるぜ」

「ふー、最近忙しくて金玉パンッパンなんだよ」

「ひっ……」

二人分の声が聞こえてきたと思った瞬間、バンッと大きな音を立てて扉が開いた。

大地からは男たちがどんな姿かたちをしているのかわからない。なにをしようかと企んでいるのかも当然わからない。

心臓がバクバクと嫌な音を立てて跳ねる。髪の毛の生え際に脂汗が滲み、全身を強張らせ、息を詰める。

大地にとってはさっきのことが完全にトラウマになっていた。されたこともそうだし、なによりあっという間に自分が雌の顔にされ、喘ぎまくってもっと欲しいとすら思っていたことに恐れを抱いているのだ。

手で口を押さえ、息を殺していると、男の怒張が尻のあわいに擦りつけられた。

「カントボーイか、穴が二つあるとか儲けだな」

「でもこの状態だと二穴挿入は無理だって」

「課金して口も使おうぜ～」

男たちが笑いながら和気あいあいと話すのを聞いて、大地の心に恐怖が膨らんでいく。

というか、課金って？口を使うってどういうことだ？

大地が男たちの言葉に戸惑っていると、ガチャリと音がして男のうちの一人が前半身が収納されている箱の中に侵入してきた。

金髪にピアスをバチバチにつけたいかにもな男はにたありと嫌な笑みを浮かべて口を押える大地を見てくる。

「おっ、結構美人の兄ちゃんだぞ！」

「マジか！一回まんこで抜いたら次は口でしてもらおっかな♪」

大地の顔を見た途端、男が大声を張り上げる。後ろからは口笛とともに歓声があがるが、大地にとってはちっとも嬉しくない。

「いやだ……来るな、来るなよおっ！もうやだっ！ちんぽやだっ！」

「お、まだ便器の自覚が足りないガキだな？いいねえ、従順なヤツもいいけどこっちもそそる。ま、お前みたいなやつも一週間もすればすっかり堕ちてちんぽ狂いになっちまうんだけど」

目の前の男は反抗的な大地を見てにやつきながら前を寛げ、ぼろんっ♡と使い込まれた赤黒い怒張を取り出した。

「おらっ！口を開けろっ！」

「ッ……」

男の命令に大地は口をぴっちり閉じ、そむける。

酷い匂いの肉棒が大地の頬や唇に迫るが、決して開かずぎゅっと目を瞑ってひたすらに拒絶して見せた。

（臭い、酷い匂いだ……っ、もうやだ、逃げたい、肉便器なんかになりたくねぇっ！）

男の先走りが頬に塗広げられる感覚に怖気が走る。

だがその一方で、先ほどかき回された膣はおちんぼの匂いに反応し、勝手にきゅんきゅん疼き始めていた。

臭くて気持ち悪いのに、もっと嗅ぎたくなる、そんな病みつきになりそうな匂い。肉便器としての種をさっきのたった一度の凌辱で植え付けられ、芽吹こうとしていた。

「そっちも突っ込んでくれ」

「あいよー」

抵抗の姿勢を見せると、男は大地にではなく、壁を隔て尻側にいる男に声をかける。

するとすぐに間延びしたりリラックスした声が返ってきて、それとほぼ同時に尻に熱く硬いものが当たった。

まんこにすり♡すり♡と亀頭をあてて何往復か。この感触には当然覚えがある。

さっきさんざん大地のまんこの中をかき回し、初めての快感を与えてきたおちんぼ様だ。

「ひっ……んぶう！？」

思わず引きつった悲鳴をあげると、待ってましたと言わんばかりに喉奥までずぶん♡と一気に硬く反り返った肉棒が突き入れられ、大地は目を白黒させながら受け入れるしかなかった。

「あー、ロン中あったけえ～」

「後ろもいい具合だな。っぐ、すっご、キツくて狭い、当たりだな♡」

大地の様子など気にも留めず、男たちは各々感想を言い合いながら腰を前後に揺すり、大地の口とまんこをずぼずぼオナホのように犯していく。

「んぎゅっ♡っおぼ、んごっ……やめ、んむうっ……」

「そういやこの後どうする？」

「っあふおっ♡っひぎゅ、あぎっ……れろ、ぢゅぶぶっ♡っは、うぐ、んンっうっ ～～～っ♡♡♡」

ぱんっ♡ぱんっ♡ぐりゅ、どちゅんっ……ぐぷぷ、ごりッ♡♡♡